

別冊第一  
滿洲問題方針決定の経緯（通譯不完全なる爲め誤解なき様に願ふ）二月十一日提出

昭和六年十二月十三日陸相就任と共に先づ混亂せる内外の諸問題に大方針を立て之が安定を圖るを第一義と考へ、當時既に滿洲の大部の戦亂の擴大し北滿に於ては一亘靜穩に歸せる後馬占山の反旗を翻へしたる爲め再び戦亂状態に入り我が軍チチハルに入城したる後にて此儘放任せば戦禍は何處まで擴大するも知れず作戰上よりは極めて優勢なる張學良部下の兵と、戦團中にて會て幾度か尼港、濟南、又情況は異なるも南京にて苦杯を経験せしを以て之を防止するの手段と共に全面的日支の戦争となるを回避し禍亂を最小限度に止むるには此程度まで禍亂の擴大したる以上餘程急速に且つ英斷によるにあらざれば收斂し難しと判断し其當時まで無方針なりしを以て左の方針を取るを必要とし首相藏相と相談し不取敢懸案となり居りて頗る曖昧なりし遼西地區の治安恢復を爲し又一方所在に残留しある匪賊軍撫を爲す事とし議會閉開中なりしを以て緊急支出による事とし閣議決定樞密院の會議となる十二月中旬なり

- 一、目的、速かに滿洲の治安を回復し禍亂の鎮靜を期す
- 二、目標、治安擾亂の當事者東四省の首腦
- 三、地域従つて張首腦の支配區域

樞密院本會議に於て討議中議員たる二三顧問官の質議應答ありて此件を承認し特に江木顧問官は理路明瞭なり其方針にて兎も角も速かに治安の回復に努力されざるを激勵されたるを記憶す。提案の經費（三又ハ五千萬圓）支出承認を決定せられ直ちに其處置を配り作戰統帥部の作戰實施となる、當時張學良は遼西地區錦州に在りて軍を指揮し居たるが如し次て熱河に移りたり、余は戰禍の擴大を避けんが爲め兵力も最小限度とし出来る丈け學良の反省を期待しつつ陰ろに兵を動かす事とし出動部隊は本動員を行はず熱河は従つて翌年春迄積極的に行動せず又最後の線、長城線は嚴守し二回まで作戰上の進出ありしに拘らず聖旨を体して參謀次長現地に急行し長城線に退却停止を命ずる事になりしが其實施に先ちて事落着せりこれ三月の交なり此間上海事變のため派遣せし兵力も停戰協定中某兵力陸中を認められ居りしが將來の事端を起すを避けて全部撤兵し其一部を北滿に移駐せしめ第一線の交代をなせり

明もなく五月末塘沽に於て日支間の停戰協定を締結しここに滿洲の戰國は終了を告げ爾後は専ら外交によりて全般の調整を爲すの必要を認め専ら其活動に待てり

國際聯盟との關係は不幸にして當時まで調整するを得ざりしが外交關係は依然繼續しありしを以て尙其餘地ありしと信ず、當時聯盟との意見の相違は政府の辯明書及聲明にあれば略す要は一は理想、一つは現實との見解の相違に

よるものなり

昭和十年六月には日支間に新に大使の交換を爲し有吉大使は中華民國主席林森氏に國書を捧呈し漸時國交と爾後の外交活動段階に入る好機となれり  
昭和十一年には西安事件ありて蔣介石氏は張學良に監察せられ對日宣戰を強要せられたる事あり、其後蔣介石氏は潛かに我國に來朝し頭山滿氏其他知己と會見せりと傳へらるるも眞偽明ならず